教授メッセージ 2019 年

● 5 月のメッセージ

令和の時代がやってきた

令和がはじまり、長い連休のおかげで、久しぶりにゆっくりと考える余裕ができた。

それにしても今年の春は、記憶に残る美しさがあった。
例年になく、満開の桜と快晴が続いたのが、理由かもしれない。
４月に入り、ふたつの嬉しいことがあったことも理由かもしれない。

もうひとつは、日本感染症学会総会で、熱研内科から、斎藤信夫先生と山藤栄一郎先生が、北里柴三郎賞と学会長賞をダブル受賞したことだ。後で学会関係者から聞いたことだが、今回の選考はハイレベルの論文が多かったとのこと。その中でのダブル受賞は誇れる結果だと思う。昨年も、鈴木基先生の西日本感染症学会賞、木岡ひとみ先生の研修医の発表のなかで最優秀賞を受賞した。賞をもらうことが、日々の精進の目的ではないが、やっていることが評価されることは、やはり嬉しい。

それにしても、昨年９月に教授コメントを出してから、余裕のない日々が続いた。その理由は、１１月に卓越大学院プログラムに採択されたことであり、１０月にロンドン大学衛生熱帯医学大学院との Joint PhD が始まったことである。１２月に Joint PhD の第二期生募集が始まり、２月に1次選考、３月に2次選考、それに向けて、両大学合同の学務委員会を随時開催しなければならなかった。一方、卓越大学院プログラムを実施するためには、Joint PhD とは別の全く新たな委員会をいくつも組織し、規約を制定しなければならない。ひとつひとつ申請書で計画したことを、それらの新たな会議を開催して合意を図りながら、さらに学内の上位のいくつもの委員会で承認を得る。そのほとんどは、長崎大学の先鋭事務職員が、少人数ながら見事にやり遂げてくれているのだが・・・。３月９−１０日には、キックオフシンポジウムを開催し、現在は6月１０日に東京で開催される第二回グローバルヘルスフォーラムの準備である。

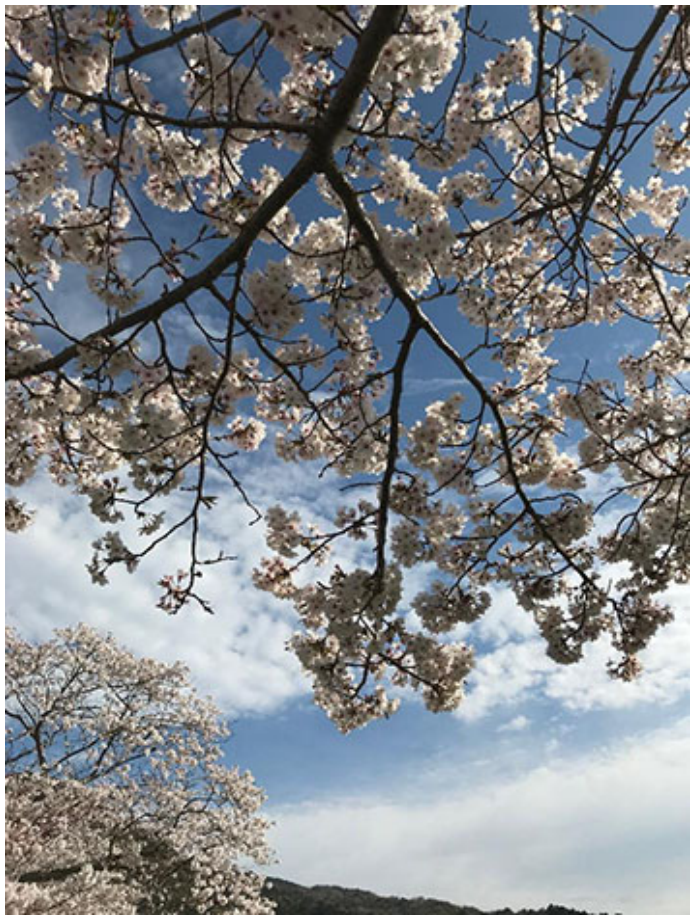
卓越大学院のプログラムコーディネーターとして、また、Joint PhD の先導役として、このふたつのために、自分のエフォートがかなり割かれることは想定してはいたが、結果として、自分自身の大学院生（指導が行き届かず停滞）、研究（論文を書く時間が減り）、教室のみんなも（診療や勉強会に避ける時間も減り）、家族（家族とともに過ごす時間が減り）も、周囲のみんなを巻き込み犠牲にしてしまったことは否められない。

でも、確実に言えることは、間接的ではあるが、TMGH ができたことで、また卓越大学院に採択されたことで、熱研内科教室員のみならず、日本の次世代と海外との接点が増えていることだ。それは、このホームページの広がりにも反映されている。

それにしても、MTM の臨床系講師陣のレベルは、今年から飛躍的に上がった。実際に途上国で診療経験の豊富な臨床医が、次から次へと海外から長崎へやってきて、情熱をもって教えてくれる。Chris Smith 教授を介して、ひとりひとりの教室員が、この贅沢な講師陣と身近に触れ合う機会がもたれる。

令和の時代、グローバル化はますます加速してゆくことを確信する。

令和元年5月5日



平成31年4月佐賀にて